

「レンブラント版画と越前和紙展」が始まる

2015年7月14日

福井県地域産業・技術振興課

2015年6月11日、オランダのアムステルダム市にある南教会で、「レンブラント版画と越前和紙展」のオープニングセレモニーが盛大にとり行われました。

ミハエル・ハウサー館長は開会挨拶の中で、越前和紙がつむいだ日本とオランダの交流を非常にうれしく思い、展示会によりさらに交流が進むことを期待すると述べました。

セレモニーには、西川一誠 福井県知事、エベルハルド・ファン・デル・ラーン アムステルダム市長、ミリアム・ファン・ウット・フェルド アムステルフェーン市長、林春樹 欧州三菱商事会社社長らが来賓として招かれました。

西川知事は、来賓挨拶の中で、福井の伝統工芸の紹介、福井県とオランダの関わり等にも触れながら福井をアピールするとともに、「長い伝統と文化を育んできた越前和紙の魅力を一人でも多くの方にご覧いただきたい」と展示会の波及効果に大きな期待を寄せていました。

セレモニーは鏡割りで締めくくられ、参加者は福井の日本酒で乾杯し、歓談を楽しみました。



セレモニーに合わせて現地を訪問している福井県和紙工業協同組合の石川浩理事は、越前和紙の特徴やオランダ国内での入手先について招待客から多くの質問を受け、今後のブランド力向上・販路拡大に大きな手応えを感じたと話をしていました。

こうした企画展開催のきっかけは、前年度の西川知事のオランダ訪問にまで遡ります。レンブラントハウス美術館を訪れた西川知事は、福井県が進めるレンブラント版画用紙の調査事業について説明し、レンブラント版画用紙の一部に越前和紙が使われている可能性があることをハウサー館長に伝えました。ハウサー館長はそのことに興味を持ってくれ、今回の展示会の開催に至りました。

越前和紙、とりわけ雁皮(がんび)を原料とする越前鳥の子(とりのこ)紙は、中世・近世の文献に、その品質の高さから、数多くの記録が残っています。また、レンブラントが愛用した和紙は「雁皮を原料としたやや厚めの紙」という報告もあったことから、それが越前和紙でないかと考える専門家もいました。

福井県では、この取組みを進めるため、専門家をアドバイザーとする越前和紙研究会を設立し、江戸時代の越前和紙やアムステルダム国立美術館所蔵のレンブラント版画用紙などの調査を進めていました。その結果、調査対象としたレンブラント版画用紙13点中の12点に雁皮が主原料として使われており、うち2点に残る紙漉き道具の痕跡が越前和紙の製造に使われる道具の規格と一致しました。



「レンブラント版画と越前和紙展」では、こうした取組みを紹介している他、レンブラントがなぜ鳥の子紙を使ったかについて、観覧者にわかりやすく伝えるため、同じ図版で、西洋紙に刷った作品と鳥の子紙に刷った作品を並べて対比させています。

作品の比較から分かることは、和紙刷り版画のインクの黒の強さと線のシャープさです。インクを吸込んでしまう西洋紙に比べ、鳥の子紙はインクが表面に残り、より強くシャープな線を印刷することが可能です。こうした効果を求め、レンブラントは、好んで鳥の子紙を使ったと考えられています。

また、会場では、現在の越前和紙の紹介もされており、越前和紙の製造方法を説明したビデオや越前和紙商品は観覧者の興味を集めています。

「レンブラント版画と越前和紙展」は、9月20日までレンブラントハウス美術館で開催されていますので、アムステルダムに行かれる方はぜひお立ち寄りください。